

「安全第一」は建て前か？

向殿 政男 Masao Mukaidono

明治大学 名誉教授

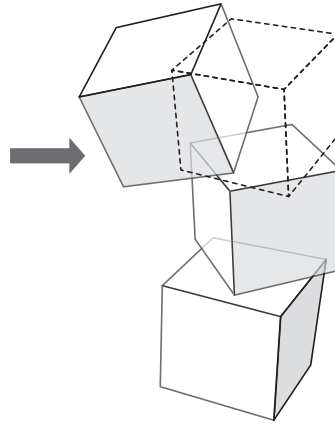
「安全第一」という標語、いたるところで目にする。特に、工場や工事の現場では、ほとんどで掲げられていて、なじみの光景である。怪我をしないように注意して、安全を優先して仕事をするに、誰も異論を唱える人はいないだろう。

一方、利潤を求めるのは、企業として当たり前。「安全第一」とは言うけれど、暗黙の裡に、安全よりは利潤を優先している経営者がいないわけではない。しかし、まともな経営者ならば、労働者の安全と健康に配慮して、安全を大事に考えているはずである。それでも、次のように考えている経営者が多いと思われる。安全だけを優先していたのでは、仕事にならない。どこまで安全に金を使えばよいかわからないし、「安全第一」を考えたら、永久に仕事はできないことになる。安全のレベルと投入すべき資金、それと利潤、品質、納期などとの兼ね合いで、バランスを考えて決断せざるを得ないのが現実である。したがって、実際には、「安全第一」は貫けないのであって、「安全第一」というのは、お題目であり、建前に過ぎないという考えである。

私は、この考え方に対して、次のように反論したい。まず、「安全第一」とは、経営者の価値判断の順番である。100年以上前の有名なUSスチールのゲーリー社長の言葉、「安全第一、品質第二、生産第三」という本来の意味を知るべきである。労災で死亡した母子の家庭にお詫びとお悔やみに行ったときに衝撃を受け、それ以来、モットーとした言葉である。企業であるから、利潤は確かに大事である（生産第三）、しかし、品質問題や顧客の信頼問題が起きた場合には、儲けを無視してもそちらの対応を優先しろ（品質第二）。ただし、人命問題が発生する恐れが生じたときには、儲けや品質を無視してもよい。まず、人命を失わせてはならない（安全第一）。企業のトップの価値判断の順番として、社長の机の上に掲げて、毎日、それを見てから仕事に就いたといわれている。現在、我が国で掲げられている「安全第一」とは、意味が多少異なっていたのである。我が国では、小田川全之が、「セーフティ・ファースト」を「安全専一」と訳し、「安全第一」の運動を始めた内田嘉吉や蒲生俊文らと共に「安全第一」が広められ^{1),2)}、現在に至って

いる。「安全第一」は、現在、作業現場の標語と化しているが、企業のトップとしての本来の意味を忘れてはならない。自分の価値判断の基準か、従業員に向かって指示するかの違いは本質的である。

さて、反論の件であるが、確かに、リスクゼロはあり得ないので、安全をリスクゼロと解釈すると永遠に達成されない。「安全第一」とすると仕事はできないことになる。しかし、大事なことを忘れている。国際安全規格では、安全は、「許容不可能なリスクがないこと」と定義されている。リスクゼロは初めから放棄されていて、安全といっても、許容可能なリスクが残存しているのである。したがって、まず、安全目標として、許容可能なリスクレベルを決めるのが最初である。そして、「安全第一」とは、製品安全でいえば、安全目標を達成していない限り、製品を設計、製造・販売、運用してならない、労働安全でいえば、生産のための機械設備や環境の安全のレベルを従業員にとって許容可能なレベルに低減しない限り、生産をしてはならない、という意味である。特に、人命を預かるような鉄



道、航空、原子力、大型の化学プラント等の分野では、安全目標を満たさない限り、事業を始めてはならないし、安全目標を満たさなくなったら、事業を停止する。これが、本来の「安全第一」の意味するところである。「人命を犠牲にしてまでも、遂行しなければならない業務は存在しない」という言葉の意味は重い。

それでは、許容可能なリスクレベルは、誰が、どのように決めるのであろうか。消費者用製品でも、労働の現場で使用する機械製品でも、リスクの高いものに関しては、国が法律で安全基準を決めている。これは、国の規制に基づく安全目標の一つであり、満たさなければ販売や使用は禁止される。それ以外にも、国際的に ISO や IEC 等で決められている国際標準の安全規格が、また、我が国には、JIS（日本産業規格）法に基づく安全規格が存在する場合もある。各業界には、国の規制や国際標準等が存在しない製品に関しては、また、存在したとしても更に厳しい業界基準が決められている場合がある。

各企業は、外部に安全基準が存在

する場合には、それに基づき、ない場合には、独自で安全基準を定める。まず、ここから始めなければならない。例えば、労働安全における機械設備の安全基準は、労使が合意して、許容可能なリスクレベルを決めるのが基本である。ただし、気をつけなければならないことがある。一つ目は、国が法律で決めている安全基準は、本来は最低基準であるということ。二つ目は、教育や訓練による人間の注意に基づくリスクの低減の前に、機械設備側のハードによるリスク低減策を先に施すべきであるという原則を忘れてはならないことである。

「安全第一」には、上記の安全基準である安全目標を達成したあと、それを超えて、どこまで残留リスクのレベルを小さくするかの競争、すなわち安全競争をすることも意味している。これが、企業における製品の質を高め、労働者の安全と健康を確保し、顧客の信頼を勝ちとって、企業の価値を高めることにつながる。一般的には、国際標準や業界基準は、国の基準より更に厳しく決められ、各企業の安全基準は、独自の価値観に従い、それより更に厳しく

決められるのが普通である。

「安全第一」は、安全に関わるどの企業でも満たすべき倫理であり、決して建て前だけ、お題目だけではない。我が国のモノづくりの歴史とその価値観の流れを見てみると、終戦直後の安いものを大量に販売して利潤を上げる「生産」重視の時代から、品質と顧客の信頼を勝ち得て結果的に利潤を上げる「品質」重視の時代、そして今、安全の価値観を重視して企業価値を上げる「安全」重視の時代に移り変わりつつある。この流れは、前述した US スチールのゲーリー社長の掲げた価値観の逆の順番「生産（第三）⇒品質（第二）⇒安全（第一）」に沿って進んでいることは、大変興味深い。

参考文献

- 1) 中央労働災害防止協会編(2011)：安全衛生運動史—安全専一から 100 年，pp.34-45，中央労働災害防止協会
- 2) 向殿政男(2017)：「安全」という言葉，標準化と品質管理，Vol.70, No.2, pp.70-71，日本規格協会